

令和5年度第1回躍動カフェ（阪神南地域）議事要旨

1 概要

- (1) テーマ：住み続けたい、移り住みたい、訪ね続けたい阪神南地域へ
- (2) 日時：令和5年7月8日（土）14:00～16:40
- (3) 場所：関西学院会館（西宮市上ヶ原一番町1-155）
- (4) 参加者：齋藤知事・阪神南地域（尼崎市、西宮市、芦屋市）に在住・在学・在勤等しており、子育てや学習支援、芸術文化、スポーツなど各方面でご活躍している20名

2 オープニングイベント：関西学院大学文化総部混声合唱団エゴラドによる合唱

3 知事開会挨拶

- ・今日は曇り模様だが、エゴラドさんの歌声で皆さん晴れやかな気持ちになったと思う。そんな中で第1回躍動カフェを開催させていただき、お集まりいただいた方々には感謝申し上げます。来月の8月1日で就任2年になるが、これまで「現場と対話主義」を大事にしてやってきた。
- ・兵庫県は5つの地域からなる広い地域で、それぞれ全然違う。都会もあれば自然もある。海も山も離島もある非常に多彩な地域。行政・政治を行う上で、540万人全員の声を聞くことは物理的には難しいが、地域の皆さんと直接顔を合わせ、意見をお聞きし、県政につなげていくという、県民ボトムアップ型県政をこれまで進めてきた。得に尼崎・西宮・芦屋の教育・企業・起業家、子育て、スポーツ、芸術文化、メディアといった様々な立場の人と時間を共有して話をするのは非常に大事だと思っている。
- ・この躍動カフェは、「わくわくし、住み続けたいと思ってもらえる兵庫県」を実現していくための第一歩。カジュアルに肩の力を抜いて話ができれば。
- ・兵庫県全体では人口減少が進んでいるが、阪神南地区はファミリー層の移住が増えている。環境や教育やまちづくりが結実した成果だと思うが、さらに伸ばしていくにはどうしたらよいか。短い時間ではあるが、ご意見・声を聞かせていただきたい。

4 意見交換

（ファシリテーター）

- ・本日のテーマは「住み続けたい、移り住みたい、訪ね続けたい阪神南地域へ」。まずは「住み続けたい、移り住みたい」という点に着目して意見交換していきたい。

（参加者）

【学習・不登校支援】

- ・私は、尼崎市で地域に溶け込んだ学習塾を運営している。「不登校支援」・「勉強がしんどいという子向け」という看板を掲げているわけではないが、結果としてそういう子が半数以上になっており、そういう子たちが集まってくる場になっている。学校に

行くのは難しいかもしれないけど、大人や社会とつながりたいという思いがあるんだと感じている。

- ・尼崎はいい意味でお節介というか、温かい人たちが多。そういう人たちに出会うための窓口になりたい。地域でイベントを開いたりお手伝いとして参加してみたり。そういう機会があれば子どもたちも生き生きするというのをこれまでも見てきた。学校以外にも面白い場所はいっぱいあるということをお伝えられる場所にしていきたい。

(参加者)

- ・私も甲子園地域で元々は学習塾を運営していたが、コロナ禍の2、3年間で、不登校の要因的な部分については、ちょっと状況が変わってきたと感じている。
- ・以前、不登校は、人間関係のトラブルとか、なんとなく理由がはっきりしていたことが多かったが、この2、3年は本人にも理由がわからない、気づいたら学校に行けなくなっていたという子たちが増えている。もちろん本当に学校が嫌で行ってない子もいると思うが、昔だったら、行ったら案外楽しくて不登校にならなかったという子もいたと思うが、今はそういう子たちが不登校になっている。
- ・また、不登校はある程度まとまった期間、学校に通えていない人たちのことをいうが、週の半分くらい行けないといった、「不登校」にカウントされない不登校も増えている。そういう子たちをなんとか支援したい。学校に行かずともこういう生き方ができるというモデルケースはあまりない。そういう生き方を1つでも多く示してあげたり、一緒に考えていったり、そういった支援していきたい。

(参加者)

【働く母親の支援・公教育のあり方】

- ・13年ほどワーキングマザーとして生活しているが、男女ともに仕事も生活も楽しめる兵庫になってほしいと強く思っている。齋藤知事のもと、「とも家事・とも育児」を進めているが、男性はどうしても勤務時間が長くなり、女性のワンオペ育児になるなど、家事の負担が大きくなっている。男性も女性も働き方改革というか、仕事・家事・育児を一緒に楽しめるような社会になってほしい。
- ・また、公立教育の充実をお願いしたい。特に高校入試。兵庫県は他の県と比べても内申点の評価割合が1：1と高くなっている。内申点を気にして、先生の顔色をうかがってしまう部分がある。今後、新しい教育の形というか、詰め込み型ではなく、得意なところを伸ばしていけるような高校入試の体制を整えていただければ、より住みやすい、住みたい町になるのではないと思う。

(知事)

- ・「不登校への対応」が今日この場では一つのキーワードかなと思う。皆さんがされているのは居場所づくりや地域とのつながりの部分。県の教育委員会でも不登校対策の議論を始めたところだが、学校の不登校対策と、皆様が現場でされていることとのギャップとか、こういう風にすればいいのに、という意見があれば教えていただきたい。
- ・家事・育児に男性が参加するのはすごく大事。今のお母さんはとても忙しく、仕事も

やるし、子育て、特に阪神間は中学受験も多いと思うが、母親がコーチングもしないといけない。それと家事。3つのことをやらないといけない。私自身、皿洗いとかたまたまに食事も作ったりしている。朝起きて食器がたまっていたらブルーになる。そういったことをやることを心がけており、広げていきたいと思っている。

- ・公立教育の充実も大事。兵庫の70パーセント以上の生徒は公立高校に通っているが、その一方で、兵庫県は高校1校あたりの予算が令和2年度は全国46位だった。そこは変えていかないとはいけないと思っている。今年から6年間で300億円を県立高校に思い切って投資する。まずはトイレの改修や体育館に冷暖房を設置するほか、部活動の応援をしたい。
- ・入試については、たしかに内申点の割合が重いという話は聞く。ただ、受験で一発勝負になると受験至上主義になってしまう。それはそれでよくなくて、やはりバランスが大事。ただ、ご指摘のような課題があるならそこはクリアしていく必要がある。

(参加者)

- ・私としては「不登校をどうするか」「学校に行くことが善」ではなく、「行かないという選択肢も残してあげたい」という思い。学校じゃなくても頑張れる場所を作りたい。

(参加者)

- ・内申点の話があったが、不登校の子が「高校からは頑張って学校に行きたい」となっても、内申点の割合が高いと巻き返せない。「頑張って学校に行くこと」はもちろん大事なので、一概に否定するつもりはないが、そうじゃない学校への行き方も増えてくれば良いなと思っている。
- ・例えば「家でオンラインで授業を受けて出席扱いにする」とかも増えてはいるが、設備面とかでも難しいこともある。また、うちの子は行っているのに行ってない子と同じなのか、という意見など出てくると思う。そのあたりのバランスなどが今後の課題かと思う。

(知事)

- ・日本の教育は単線型の仕組みが多く、出席することが前提になっている。複数の選択肢をどう許容していくか。オンラインや内申に変わるようなものが何かできるのか。そこは考える必要がある。ゲームを夜遅くまでやってるとか、コロナも一因なのかもしれないが、色々な事情で朝起きれない子が増えてきている。だけど進学したいとか自分の可能性を広げるためにどうするか。無理して学校に来させるべきなのかとか、そこまでさせなくてもいいのではとか、考える必要があるのかなと思った。

(参加者)

【子どもが自分らしく過ごせる町】

- ・低学年の不登校が非常に増えている。公教育の話にもつながるが、「適応指導教室」というものが公教育の機能としてあるものの、これがほとんど機能していない地域が多いと個人的には感じている。特に低学年の子は全然行けない。

- ・私のやっている活動は、発達に課題がある子や不登校の子に限定はしておらず、どんな子もありのまま、自分らしく過ごせる場所を目指して活動している。
- ・芦屋の中で「脱自立」を目指してやっていきたい。芦屋は元気な高齢者が多い町。居場所づくりの中でお母さんたちの負担が減れば働きに出られるし、高齢者が見守りや送迎の手伝いをしたり、地域全体で子どもの成長を支えていきたい。行政がカバーできていないところを私たちは埋めていきたい。

(参加者)

【部活動の地域移行】

- ・私は地域のスポーツクラブとして 2016 年から活動をしているが、その頃から学校の部活動が社会のニーズとずれてきているという話があった。教師が多忙で、部活動の指導が、本業である子どもたちの教育の指導だとか生活指導の業務を圧迫しているということが言われ始めた時期でもある。
- ・最近では地域にも、子どもたちの成長を応援したいという人たちが増えており、地元の企業や大学が、何かやれることはないかと、サポートしてくれることが増えている。我々は子ども食堂もやっているが、企業・大学の 18 者くらいがいろんな形で支援してくれている。子どもたちからすると、大好きなバスケットボールを通じて社会との接点、交流が増えている。部活動が地域に出て行くというこういうメリットもある。
- ・ただ、なかなかこういう活動が普及しない要因として、学校の中に、子どもたちがスポーツをするリソースが集まっていることが挙げられると思っている。例えば、施設・器具・子どもたちのスケジュール。基本的に学校に管理されているものが多い。
- ・学校と部活が終わって、我々の団体の活動に参加して、塾に行く。この中で、少しでもなくせるものがあるなら、余白が生まれ、子どもたちも新しいことに興味をもち、多様な人たちと交流することなどに時間が割けるようになるんじゃないかと思う。

(参加者)

【未就学児や障害のある方も体験しやすい芸術体験】

- ・ピッコロ劇団では公民館やピッコロシアター・図書館などで「おはなし BOX」というイベントをやっている。最近ではだんだん口コミでお客さんが増えてきたが、これは大人も子どもも楽しめる無料の講演。小さな子どもを連れて演劇公演を楽しみたいという人はたくさんいるが、ほとんどのお芝居が未就学児は入場不可で、幼いころから観劇体験させる機会は非常に少ない。
- ・一方、一緒に演劇を見るのは親子の関係を深めると感じており、見終わった後に感想を言いあったり劇中歌を何回も繰り返し歌ったり。そういう、ともに見る（共視）経験が親子の絆を高めると感じる。是非このような、無料の未就学児と親のためのイベントが、ピッコロ劇団だけではなく、いろんなところで増えたらいいなと思う。私たちももっと取り組んでいきたいと思っている。

(知事)

- ・部活動の地域移行に関連して、兵庫県でもスポーツの公民連携を進めている。例えば

西宮ストークスやヴィッセル神戸とも連携していて、県内の子どもたちを無料で試合に招待した。今年からスポーツ振興課を知事部局に移したが、スポーツと地域活性化はすごく親和性がある。そこをもっと広げていきたいと思っている。

- ・私も未就学児が芸術文化に触れる機会はすごく大事だと思っている。ちょうど来週から「ひょうごプレミアム芸術デー」を開催する。これは1週間、博物館や美術館を無料で開放するというイベント。去年から始めたもので、昨年度は9施設だったが、今年は市町の施設含め89団体に参画いただいた。今年のテーマとして、おしゃべりができる日、一時保育の場所を準備したり、障害がある方とかも触れたりする機会、子どもと一緒に行けなかった機会を増やしていきたいというのがある。
- ・また、最近映画館でもあったと思うが、民間の興行施設とも連携して、子育て中の方、障害のある方が、気兼ねなく見れる日を増やしていきたいと考えている。

(参加者)

【IT・プログラミング教育】

- ・私たちは小学校・高校でプログラミングを教えているが、IT教育・キャリア教育が非常に大事だと思っている。私は元々ビデオカメラマンで、動画制作、採用コンテンツ制作を行うような会社で普段はマスコミ的な仕事をしていましたが、仕事で高校に行ったときに、動画のインターンシップに来たい人を募ってみるとすごい手が上がった。最近はYouTuberになりたい子が多い。活動の一環で高校生と一緒に動画制作もしており、その中で企業の取材にも行っていたのだが、コロナ禍で企業への取材が不可になった。そのとき目についたのが、産業用ロボット。ゲームのコントローラーみたいなもので動いていて、子どもたちにウケるんじゃないかと思い教材として教え始めた。
- ・今では高校生が小学生に教えているが、その中で、子どもたちの悩みとかを聞く機会もある。先ほどは不登校の話もあったが、学校は嫌いだが、ゲームは大好きという子は多い。そんな子たちの相談に乗ったり、将来独立したいという大学生とロボットを作りながら、もしくは作り終わった後の食事の時間にそういった話をしたり、相談に乗ったりしている。創業したいという子もいるがなかなか相談相手がない。ロボットという教材を使って、それをきっかけに悩みに答えたり、創業の際の事業計画書の書き方の相談に乗ったり。そういうこともしている。

(知事)

- ・動画コンテンツのインターンシップというのは小学生も受け入れているのか？

(参加者)

- ・インターンシップは高校生。高校の課題研究の授業でやっていた。期間的には3か月。動画だけ作るのはもったいないので、企業さんの技術力を使った新商品開発とかもした。そのストーリーが面白いとメディアの取材も受けて企業の売り上げの増加につながったこともあった。

(知事)

- ・(参加者の企業では) 小学生の受け入れもしているのか?

(参加者)

- ・小学生もしている。大学の施設を無料で借りてプログラミング教育をしている。ロボットを学びたい子たちを招き毎週土曜日、大学の教授に教えてもらっている。

(知事)

- ・兵庫県では「トライやるウィーク」をやっている。これまでやっていた飲食店とかそういうのも大事にしつつ、今の時代に合わせて、動画の制作とか、そういった選択肢も増やしていけるといいのかなと考えている。そういった意味では、インターンを受け入れるための素地はありそうだと今お話を聞いて思った。

(参加者)

【学生が地元企業を知る機会の創出】

- ・私の地元の三重県と比べ、阪神南地域は大学が多いが、就職となると大阪や東京など、ここを離れていくイメージがある。地元の企業に目を向ける機会がとても少ない。地元企業がこういったことをしているのかを知る機会がもっとあればよいと思う。

(知事)

- ・兵庫県は大学生の人数は全国でもトップクラスだが、就職となると大阪・東京に行かれる方が多く、そこは課題だと認識している。
- ・兵庫県は製造業が多く、サービス業を希望される人とのミスマッチがあるが、どうやってマッチングしていくかが大事。
- ・理系の大学生も多く、高校も理系が強い。先日、県立大学でも話をさせてもらったが、「自分の研究分野が活かせる企業がどれくらいあるのか」「研究機関で働きたい」「個別のニーズに応じて就職先を選びたい」「やりたいことをやりたい」という声もあった。他にも福利厚生を重視しているとか。奨学金の返済を支援してくれる企業かどうか。そういったところをサポートしていきたい。
- ・県では今年から、5年間で約100万円の奨学金の支援を始めた、県内就職されたら奨学金の支援をさせてもらう。他にも自分の興味がある分野とのマッチングをしていきたい。(参加者の学生は) 今2回生ということなので、来年再来年には間に合うようにやっていきたい。

(参加者)

【ワークライフバランス・新しい働き方】

- ・私は主に主婦を対象に活動している。お子さんがいる方は、コロナ前から、一斉休校の際には休まないといけない、会社に迷惑かけるといった理由で、やめてしまう人がたくさんいた。そこにコロナ禍もあって、働き方を見直す方が非常に増えた。働いている方でも何か副業ができないかという人もいる。

- ・最近ではコロナも収束してきて、もうテレワークはいらないと思う人もいるかもしれないが、先ほど話題になった、不登校の子どもがいるお母さんたちは、お子さんのそばについてないといけないから働きに行けないというパターンもあり、そういった相談を受けることも増えている。しかし、そういった人たちの「テレワークで仕事をしたい」という需要の増加に対して、圧倒的に仕事がない。
- ・私の事業では、悩み相談、スキルアップのための勉強会のほか、テレワークは孤独になりがちなので、そういった人たちの交流会を積極的に実施している。
- ・ただ、私たちのできる範囲には限界がある。また、在宅ワークの求人とかは怪しいものも結構あり、騙されるんじゃないかとか、不安を抱く方も多い。テレワークでできる仕事を増やしていくことを企業に働きかけること、安全で正しい情報を皆さんに与えていくこと、交流する機会を作ることなどは、行政側が、行政という安全な立場や、影響力が大きいところを出してもっとやっていただければ、色んな人たちが働きやすい環境ができてくるんじゃないかと思う。

(知事)

- ・私自身、働き方改革は大事にされていて、6月から出勤率4割を目指したトライアルを始めた。現在の県庁舎は耐震性能に問題があり、以前から庁舎建替えも検討していたが、1,000億円かけて建て替えるのは県民の皆さんの理解を得られない。4割出勤にしてオフィスをダウンサイジングしたい。これは全国初の取組だが、成功すればテレワークはさらに進む。また、私が知事になってからはペーパーレス化も進めている。
- ・企業は人手不足で悩んでいる。一方、色んな事情があって在宅などで働きたい人もいるという話もあった。そこをどうマッチングするか。加えて、行政が安全性とか安心を担保できる仕組みづくりが必要。来月くらいに産業労働部で人手不足の対策会議を開催する。今おっしゃっていただいた内容含め、詳しく話をお聞かせいただきたい。オブザーバーとして参加いただくか、もしくは事前のヒアリングとかになるかもしれないが是非ご意見いただければ。

(参加者)

【アスリートのセカンドキャリア】

- ・阪神・オリックスの2球団の選手は結構、西宮・芦屋・尼崎に住んでいる。私自身、12年間の現役を終え、セカンドキャリアを考えざるを得なくなったときに、地元の働きやすいところで働かないといけないと思った。
- ・プロ野球選手は、それまでは野球に打ち込んで来ていて、勉強していない人が多い。夢を持って入ってきて、現役中は野球のことしか考えていない中、11月に戦力外宣告を受ける。球団から次の仕事を紹介してもらえることもあるが、ないこともある。
- ・この地域には選手がたくさん住んでいるが、気軽に行ける店がないと常々思っていた。そこで、選手が集まれるような店を作りたいと思い、西宮で起業した。現役時代は西宮駅の周辺にはほぼ行ったことはなかったが、始めた当時はシャッター街で、ここをいい町にしていきたいというチャレンジ精神でやってきた。10年やってきたが、やれば盛り上がる町だなというのがわかったし、ここで起業してよかったと思っている。

- ・10年前は、セカンドキャリアとして飲食店を経営する選手も多かったが、最近では辞める選手の半分以上がサラリーマンを希望している。しかし、知識もないし、社会に放り出されても何ができるのかというのがある。セカンドキャリアに向けての講習とか税の計算とか。プロ野球選手は年収が多いがそれがいきなりゼロになる。12月までは給料あるが1月からゼロ。貯金できてない人もいる。
- ・現役生活が終わっても、こんな起業をしたらこういう生活できますよという代表例になりたいという思いで始めた。選手達はお子さんもいる人も多くいるし、自身の子どものためにも地域密着型というか、ここに残ってやってほしい。

(知事)

- ・セカンドキャリアの話もとても大事。今の立場になられて、こういうことを伝えたいとかこういうことを知っておけばよりスムーズにできたのではとか、そういうご意見があれば伺いたい。

(参加者)

- ・10年前はあまりそういった事例がなかったというか、どういった就職先があるのかもわからなかった。セカンドキャリアといってもやりたいことをやれる歳でもないし、家族を支えることも必要で、ある程度収入も必要。企業には人手不足という話がある中で、そういった企業とのコラボができればいいんじゃないかと思う。

(知事)

- ・是非その部分については考えていきたい。兵庫は、野球・サッカー・バスケットボール・ラグビー・ゴルフなど、プロスポーツ団体が多い。プロスポーツ振興の要素として、セカンドキャリア支援についても連携する必要がある。現役生活が終わった後も、県内企業に就職していただけることが、結果として兵庫県にも人手というか新たな価値を生んでいただくことにも繋がる。

(参加者)

- ・2月のキャンプの時にセカンドキャリアについて説明があるが、シーズン前であり頭に入ってこない。チーム単位でのキャリア説明会とかが逐一あれば次のことを考えることもできる。何年後にどうなっているかイメージすることができれば。

(参加者)

【介護のあり方】

- ・私は出産の5か月後に介護が始まった。介護が始まると「おしゃれ」がなくなり、それを受け入れられない。人にも言いづらい。
- ・介護になったら終わりだと言う人が多いが、みんな歳は取っていくものだし、誰しも介護を受ける可能性はある。自分が高齢になって介護を受けることになったときに、洋服だったり、自分で選べるもの、自分・家族の気分があがるものを作りたい。
- ・たとえば、防水シートひとつとっても、無機質なビニールを洗っているとき、「自分

何しているだろう」という孤独感・虚無感を感じた。そういうことを感じている人は他にもいるという話を周りから聞き、介護・福祉の中にも彩りを添えられたらと思って活動を始めた。

- ・介護をしている側は、周りから、「頑張っ」てと言われても、「これ以上どう頑張ればよいのか」と感じてしまう。聞く側としても、この人には何を聞いたら傷つけないか、と気を遣ってしまい、触れられない。腫れ物扱いするのではなく、例えば高校生とかの若者が見たときに「カワイイ！」と近づいてきてくれるものを作りたい。

(知事)

- ・県として、ヤングケアラーの支援・相談窓口は始めたところだが、ヤングケアラー以外の20~30代の人についても、介護が始まったときには行政がサポートしないといけないと感じた。

(参加者)

- ・先日、民生委員に講習を行う機会があったが、行政に支援を求めたいときに、どこに認定を取りに行ったらいいのかわかっていない人がとても多い。そもそも介護・福祉の知識が一般的なものではない。認知症になって徘徊が始まった場合は、老人ホームではなく、まずは精神病院に入院し、投薬治療等によって共同生活ができるようになったら老人ホームに入れるようになる。そういうことを知らない人が多い。

(参加者)

【クリエイターへの支援】

- ・私は11年間、芸術家・デザイナーとして活動してきた。アートは自分自身で生み出すもので、自分の絵の描き方を教えてくれる人はいない。
- ・最初の2、3年は「楽しい」という気持ちだけで活動していたが、周りから、「絵では食べていけない」と言われ、今後のことを考えたときに、創作するだけでなく、アーティストにアドバイスをする人たちの存在が必要だと思った。我々は、一般の人が絵に触れる機会の提供や、アーティストの支援、アーティストを育成できる場になることを目指している。
- ・学校ではアートについての技術は学べるが、絵の売り方や、ファンを増やすことなど、ビジネス的な部分は教えてくれない。ほとんどのアーティストたちが、技術はあっても売ることができない。私はそういったビジネス的なことを教えてもらえるような場に出会って、Twitterなどを活用して自身の作品を見てもらえるようになった。そういうアーティストのインキュベーション的な仕組みがあればいいと思う。

(知事)

- ・芸術家が食べていけるようになるためのノウハウ・スキルを共有できるようにすること。それはたしかに大事な部分。行政としてどういったことができるかについては、既存の仕組みがあるならそこも踏まえつつ検討していきたい。

(参加者)

【多文化共生】

- ・私は、芦屋浜で 15 か国のメンバーと一緒に日本語や外国文化を学ぶ、地域の方との交流をしながら、旅行では知り得ないような情報などを教えてもらって、学び合う活動をしている。
- ・芦屋は公園がたくさんあって、パブリックスペースがたくさんあるのはとても魅力。ピクニック・ペタンク・太極拳を通りがかった地域の人にも声をかけてやっている。芦屋浜だけではなく、西宮浜、尼崎の森といった環境資源も豊富。そういった資源を日常的に使用し、この地域での豊かな生活をアピールしていきたい。

(参加者)

【沿線活性化】

- ・他の鉄道会社と話をする際、よく「阪神沿線はいいですね」と言っていただけ。海と山があって、都心にも近い。歴史や文化に触れられ、豊かな生活ができる、大変魅力的な町。住んでいる人にはそこを認識していただければと思う。
- ・人口減少・高齢化が進む中、この地域に移り住んでもらうためには、阪神地域外に住んでいる人が阪神地域に憧れてもらうことも大事。そのために我々としては、まだまだ情報発信が弱いと感じている。鉄道会社のひとつの特性として、沿線なら PR や賑わいづくりの交流の場づくりもできるが、沿線外になると知っていただく機会がない。SNS や他の鉄道会社との連携による PR をしている。
- ・この情報発信について、私は仕事の中で、西宮市・尼崎市と関わりがあったが、自治体でも同じ課題があると感じている。市域外に何か知らせるとなるともっと日本全体への PR が必要。

(参加者)

【地域の活性化について】

- ・私は、信用金庫で勤務をして 20 年になるが、新任職員の時から、「信用金庫は地域と運命共同体」と教えられてきた。地域が活性化すれば我々も活性化するし、衰退すればともに滅びる。そういった考えのもと、我々に何ができるのかを常々考えている。
- ・その一環として現在は「あまちゃん・しんちゃんプロジェクト」という地域貢献活動を行っている。当行は全部で約 90 店舗あるが、各支店が、自治体・企業・住民・学校関係といった地域の方とともに、地域課題を探して、連携しながら地域課題の解決に向けて取り組んでいる。そういった取組の中で、信用金庫としてできることをやっていきたい。

(参加者)

【地域メディアでの魅力発信】

- ・私は長崎県の五島列島出身だが、尼崎のことを何も知らない中で、ラジオをさせてもらうことになった。そこで、「尼崎のことを知りたい・人々と友達になりたい」という思いでまち歩き取材を始めた。この地域の人たちとふれあうコーナーを 21 年間さ

せてもらったが、出会った人たちが魅力的。暖かい、人情と愛にあふれる町だと思っている。そういう人たちの活躍や尼崎の情報を伝えたい。だからこそ、FM 尼崎は閉局することになったが、新たに自分たちでやることにした。

- ・「住民の・住民による・住民のための放送局」がコンセプトであり、尼崎の皆さんに活躍してほしい、輝いてほしいと思っている。今後は「あつまれ尼人達」という番組を作る予定。
- ・しゃべれる人たちはたくさんおり、10月の開局に向けてみんなで取り組んでいる。現在1回目の研修会が終わったところだが、全員やる気に溢れている。「単なる地域の放送局」ではなく、尼崎の魅力を伝えるという役割や、町づくりの色々なことを担っていけるような放送局にしていきたい。

(参加者)

【シビックプライドと市民パーソナリティ】

- ・我々の西宮さくら FM は、第三セクターで25年やってきた。開局当初はアナウンスの事務所に入っているパーソナリティも多かったが、ここ数年はほとんど市民パーソナリティに限定している。私自身西宮生まれ、西宮育ち。開局3、4年くらいのお話をお話いただき、ここまでやってきたが、個人的に思うのはやはり生の声がすごい大事だということ。今は私ひとりで音楽番組をさせてもらっているが、自分のポリシーとして、私自身がその魅力を理解できたものだけ発信している。それこそがパーソナリティの生の声を届けるということでもとても大事な部分。
- ・西宮の人たちは自分たちのことを「みやっこ」というが、みやっこは地元愛が深い。大学や就職で一度地域外に出ていったとしても、子育てのために西宮に帰ってくるくらい西宮愛が強い。そういった市民パーソナリティが番組をお送りしていることが、ひとりひとりが嘘のない、熱量のある発信ができていく要因になっていると思う。
- ・元々は市内でしか放送を聞けなかったが、災害放送に変わってからは、ドイツ・ドバイ・アメリカからもお便りをいただいた。福島などの同じ震災を経験している町同士が繋がるきっかけにもなっている。

(知事)

- ・多文化共生について、兵庫県は外資系企業も多いし、スポーツ球団もあって外国人選手もいる。国際的な受け入れの素地はできている。よりハッピーに暮らしていただけるような環境づくりをやっていきたい。
- ・特に、最近パートナーシップ環境の整備についても要望がある。多様な人々が兵庫・阪神間に住みやすい町を作りたいという声が多く、そのあたりもやっていきたい。
- ・沿線活性化に関連して、住宅をどうするのかも大事。マンションが高くなっていて、とても買えないという声も聞く。そこをどう解決するか。大阪・京都は転出が多いが兵庫県は、特にこの阪神間については、30~40代の転入が多い。住みよい環境や教育、私立高校も多いが、阪神間の私学は大阪・京都から3割程度の人 coming いるくらいで教育水準も高い。そこに住みたいという方たちへのニーズをどう提供するのかは大事なテーマだし、地域の活性化につながっていくと思う。

- ・地域の方に、地元の情報を提供することはとても大事だと思っていて、その役割を担っているケーブルテレビとかのローカルメディアも大切。地域の方が自分の住む地域を誇りに思うことが、シビックプライドにも繋がっていく。地域外への発信も含めて、しっかりやっていきたい。先日、尼崎クラブでの朝食会の際にも「みんなのあま咲き放送局」についてご説明されていたが、もし機会があれば出演させていただきたい。

○休憩：15：50～16：00

(知事)

【フィールドパビリオンについて】

- ・2025年の万博では、2,800万人が世界中から関西にやってくると言われている。昔の大阪万博は先端技術のアピールだったが、今回の万博は、人類共通の地球温暖化やフードロス、いわゆるSDGsの課題を解決する姿、テーマを発信するものである。兵庫県は多様な地域でいろんなことを取り組んでいる人がいる。その現場そのものをパビリオンにできるという思いがある。それを「フィールドパビリオン」として、現場そのものをパビリオンにして発信していくプロジェクトを進めている。今は130のプログラムがあってそれぞれ仕組みづくりをしている。万博前にそういった取り組みを仕上げていきたい。そして、万博が終わった後もレガシーとして、兵庫県のファンになってもらう。子どもたちを含めて色んな人たちに、自分たちの地元でこんなすごいことをやっている人がいるんだということを知ってもらう。これがふるさとを誇りに思うことにも繋がる。まだまだ募集中なので皆様にも検討いただければありがたい。

○ひょうごフィールドパビリオン（阪神南地域）紹介

下記3件のフィールドパビリオンについて担当団体から説明

- (1) 尼崎運河クルーズツアー
- (2) Pick Up あまがさき 自分で見つけるフィールドガイド
- (3) 灘の酒造産業を支える奇跡の「宮水」と西宮郷酒蔵

(参加者)

【フィールドパビリオンと尼崎の海】

- ・尼崎の魚を有効活用する活動をしている。元々は尼崎の海のPR活動が目的だったが、今では釣り人さんにも協力いただき、釣れた魚の余剰分を食材として子ども食堂に提供したり、B型支援就労施設に提供して猫のエサに加工したり、残ったアラを肥料化して農家に提供し、できた食材を子ども食堂へ支援してもらう活動をしている。皆さんのイメージとは違って尼崎の海は年々きれいになっている。
- ・44年間尼崎の海を見てきたが、昔は匂いや水面の色も悪かった。今は匂いもないし、水面もキレイ。それは行政や環境団体の取り組みが大きい。毎月数値を検査して、食材を子ども食堂に提供している。

(参加者)

【フィールドパビリオンを活用した問題点の解決】

- ・私は、20年以上シンガーソングライターとして活動している。コロナ禍でライブができない中、Amazon プライムや Netflix に勝るコンテンツを用意できているかどうか重要だと気づいた。勝るコンテンツでないと、家から人を引っ張り出すのは難しい。
- ・また、今までは自分が歌いたい、自分がという主体でやってきたが、今の世の中、人から押しつけられることにすごく抵抗がある人が多い。参加する側が何か体験をする、何か得をするというベネフィットがないと人を動かさない。そういうのがあるからこそ、また行きたい・紹介したいと思ってくれる。
- ・それに一人一人の小さな範囲での体験が必要だと思っている。そのためには万博に向けた、体験型のプレイベントがあってもいいし、体験を通して感想を述べたり、写真をアップしたりするような SNS の場があったりというのがあってもいい。また最近の子は公園で YouTube を観たりゲームをしているが、ゲーム性がないと子どもを巻き込めない。規模の小さいプレイベント。ネットでの取組やいろんな方がいろんな形で参加できる仕組みがあればいい。外に出るのが難しい人はオンラインを活用すればいい。
- ・さきほどは大学生が地元でのことに興味を持たないという話もあったが、例えばインターン制度をフィールドパビリオンに取り入れて、ここに来れば得をするよという仕組みを作ったり、フィールドパビリオンのガイドにアスリートを登用したりとか。あらゆるジャンルを超えたミックスができれば、今日の話にあったような問題点を、このフィールドパビリオンで解決できるような気がした。

(知事)

- ・まさにフィールドパビリオンのテーマが「知って、見て、体験し、学んでいただく」ということで、体験プログラムを軸にしている。おっしゃっていただいたようなインターンシップを含め、広がるようにしっかり頑張っていきたい。
- ・またフィールドパビリオンには、もうひとつポイントがあって、観光だけではなく、社会課題の解決に向けて、皆さん様々な活動をされているが、その活動の現場もフィールドパビリオンだと思っている。教育・福祉・介護・多文化共生・コミュニティ FM もそうだが、そういったものをどうやって持続可能な形にするため、挑戦している、頑張っている姿もフィールドパビリオンの要素。皆様にもぜひエントリーを検討いただければ幸いである。
- ・例えば、子育てや介護の問題は日本だけじゃなくて、世界にも同じような課題があるはず。万博に来た海外の方が、日本でどのような不登校や居場所作りをしているのか知りたいとき、西宮や尼崎でこういう取組があるというのをフィールドパビリオンとして提供できれば、そこに来て、議論していただき、現地に帰って取り入れてみようとなれば、全人類共通の課題をシェアするという万博になる。

(ファシリテーター)

- ・今日は、阪神南地域にはたくさんの活動をされている方がいるんだというのを皆さんに分かっていただいた。尼崎・西宮・芦屋といった市域を越えて活躍している皆さん

が協力していくということがこの地域を元気にしていくのではないかと思う。

- ・今日皆さんにお会いして、活動をされている人たちって周りの人たちに愛されている方が多いんだなと感じた。コツコツマメで、大義を語って、ちょっと甘え上手な人というのが皆さんの共通点かなと思う。皆さんの力で阪神南を盛り上げていただければと思う。

5 知事閉会挨拶

- ・まだまだ話を聞きたいが残念ながら時間になってしまった。私が色々と質問してしまい、時間が押してしまった。それくらい今日の皆さんのお話・提言が今すぐにでも県政に取り入れたいと思うものばかり。みなさんと一緒にこういった場を共有させていただくことができよかった。
- ・これこそが県民の皆様から直接お話を伺って、いい取組やいいアイデアを県政に直接繋げていきたいという躍動カフェの目的。今日いただいた提言やアイデアを繋げていきたい。ぜひこれからも兵庫県政へのお力添えいただければありがたい。今日はありがとうございました。